令和四年度　弘学館入学試験

高等学校　国語問題

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

人間と自然の失われた調和を取り戻す――この言葉は、「地球にやさしい」というキャッチフレーズと同じように、心に響く美しい表現かもしれません。けれど、現在の環境問題を考えるとき、はたして適切な言葉と言えるのでしょうか。そもそも、この表現の基礎にある疎外論的発想は、有効な論理を提供するのでしょうか。

①疎外論をとる場合、a オチイりやすい危険は、歴史のネジを逆に回し、未来ではなく過去へと b カイキすることです。エコロジーで、「自然との調和を取り戻す」と語られるとき、じっさいには過去の「原初的な調和」へ舞い戻るにすぎないのです。人間中心主義を批判して、［A］的な自然が称賛されるとき、目標とされたのは過去にほかなりません。極端な場合には、近代の科学文明が否定され、原始的な生活を c テイショウするようにさえ見えます。

しかし、「疎外論」が前提とするような、原初的な「自然との調和」というモデルが、怪しいのではないでしょうか。こうした状態が、はたして存在したことがあるのでしょうか。現在以前の、いつの時代に、そのような「人間と自然の調和」が成立していたのでしょうか。人間による自然支配は、ある意味では文明化とともに始まった、と言えます。人間が知力を使って自然とかかわるかぎり、自然支配の欲望は不可避なのです。

とすれば、人間の歴史をどこまでさかのぼっても、原初的な「人間と自然の調和」には達しないのではないでしょうか。むしろ、ハッキリいえば、こうした「原初的な調和」なるものは、後になって理想化された状態にほかなりません。人間中心主義を批判する人たちは、自分たちのロマンチックな自然への憧れを、あたかも原初的な状態であるかのように空想したにすぎないのです。

しかし、こうした自然への憧れが、近代の豊かな社会のもとで発想されることに、注意すべきです。それは、たとえば、都会で裕福に生活している人が、ときどき田舎の生活に憧れるようなものです。つぎのようなエコロジストの記述を見ると、②その感が強くなるのではないでしょうか。

自分で井戸から運んだ水や自分で集めた木々と共に、田舎にある自分のコテージにいる時には、どんな金持ちよりも豊かだと感じます。ヘリコプターに乗って山頂に行ったとします。景色は絵はがきのように見え、頂上にレストランがあれば、食べ物がちゃんとできていないと不満を言うかもしれません。でも、もし苦労してふもとから登ったならば、深い満足感を味わって、スキーのワックスと砂が混ざったサンドイッチでさえ、すばらしく美味しいと思うはずです。

しかし、「頂上のレストラン」と「砂混じりのサンドイッチ」を対比するのは、裕福な一部の人にしか意味をなしません。いつもレストランで美味しいものを食べている人には、「砂混じりのサンドイッチ」もたまには美味しく感じられるでしょう。しかし、自分のコテージももたず、ヘリコプターに乗ることもなく、土ぼこりのする道路脇で「砂混じりのするサンドイッチ」を食べる人にとって、それは美味しいのでしょうか。

少し視野を広げて考えてみましょう。疎外論的発想で、「自然」への憧れを語るとき、前提されているのは、「人間」との二元的な対立です。「自然」を、「人間による支配」から解放することが、目標にされています。しかし、③この対立そのものが問題なのです。

たしかに、「自然」と「人間」の対立は、古くから常識的になってきました。「自然」と「人工」は、しばしば対義語として使われますし、「自然」と「文化」の対立も、同じように考えられます。［B］的ではない「自然」に対して、「文化」が人間的現象であることは、いわば定義に属しています。そのため、エコロジーでも「自然」を考えるとき、［B］的ではない「自然」が想定されてきたのです。

しかし、すでに確認したように、人間抜きの「自然」とは抽象的な虚構にすぎません。人間が眼前に見いだす「自然」は、それに先立つ世代によって手の加えられてきた「自然」であって、「社会的形成物」と表現できます。「自然」は、つねにすでに、多くの人々によって手が加えられ、また今後も手が加えられていきます。人間の活動を離れて、「自然」が独立にあるわけではありません。その意味では、「自然」は、「文化的形成物」と呼んでも、間違いではないでしょう。

このように考えると、［C］的な方向についても、重大な d シシンが示されるように思えます。いままで、環境保護のためには、人間が自然にできるだけ介入しないことが、求められてきました。人間が自然から手を引くことが、エコロジーだというわけです。ところが、そんなことは、そもそも不可能ですし、望ましいわけでもありません。むしろ、人間が自然をどう管理していくかが重要なのです。

では、④「自然」にどうかかわればいいのでしょうか。ブライアン・ノートンという環境保護論者は、『持続性』という本のなかで「適応的管理」という概念を提出しています。彼は、「環境※1プラグマティズム」の立場から「人間中心主義」を唱え、自然に対する「管理」を力説しています。しかし、「管理」といっても、あくまでも「適応的管理」であって、従来批判されたような「人間中心主義」ではありません。［I］、どんな「人間中心主義」が擁護可能なのでしょうか。

「人間中心主義」とは、「人間の利益実現を中心に置く立場」を意味します。しかし、このとき「人間の利益」をどう考えるかが問題です。［II］、ある種の生物が食糧として「経済的な利益」になるからといって、乱獲してしまえば絶滅してしまい、

結局は「経済的利益」に反します。そこで、「経済的利益」のためにも、生態学的観点が必要になります。[Ⅲ]、「人間的利益」を「経済的利益」に限定する必要もないでしょう。「人間」が多面的に理解できるように、「人間の利益」も多様な側面から理解できるからです。人間の生存にとって、きれいな水や土壌や空気などは、人間の利益と言えます。

また、「人間の利益」という場合、しばしば誤解されるように、個人の欲求を短期的な観点から求めるだけではありません。むしろ、地域や社会の利益を考えて、個人の欲求を e ヨクセイ する こともあるでしょう。あるいは、将来世代のために、現在の利益が制限されることもあります。その点では、「人間中心主義」だからといって、現在の個々人の欲求をそのまま認めるわけではないのです。ぎゃくに、長期的な視野に立って、広い観点から利益を考慮する必要があるわけです。

（岡本裕一朗『12歳からの現代思想』）

注　※1　プラグマティズム――有用性を重視する考え方。

問1　波線部a～eのカタカナを漢字に直せ。楷書で大きく書くこと。

問2　空欄A～Cに入る適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア　客観　イ　実践　ウ　牧歌　エ　人為　オ　進歩

問3　空欄Ⅰ～Ⅲに入る適切な言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア　たとえば　イ　なぜなら　ウ　または　エ　しかも　オ　では

問4　傍線部①「疎外論」とあるが、ここで言う「疎外」とはどういうことか。それを説明した次の文の空欄に、本文中から十四字の適切な表現を抜き出して埋めよ。

［今の状況が［　　］という状態から遠く離れてしまっていること。］

問5　傍線部②「その感が強くなる」とあるが、ここでの筆者の考え方の説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア　筆者は、日ごろ自然とは接点を持たずに生活する人が、自然と共に暮らす人の日常体験を無視し、自分に都合の良い自然観だけを正しいと考えて執着する態度は、改めるべきだと思っている。

イ　筆者は、自然から距離を置いた都会で不自由なく生活する人が、現実の自然について知らないまま、美化された自然を想像によって勝手に作り出そうとすることには、問題があると思っている。

ウ　筆者は、田舎の自然の現実を目の当たりにしている人が、実際の自然を全く知らない都会の人が都合の良い自然の姿を作り上げていることについて何も言わないのは、理解できないと思っている。

エ　筆者は、経済力にものをいわせて自然を楽しもうとする人が、現実の過酷な自然に目を向けることなく、過去の素朴な雰囲気を持つ自然だけを追い求めている点は、批判されるべきだと思っている。

オ　筆者は、過酷な自然と共に暮らす人が、都会で裕福に生活をする人がつくった自然のイメージを受け入れて、自然が本来持っている多様性に目を向けるようになることは、必要であると思っている。

問6　傍線部③「この対立そのものが問題なのです」とあるが、ここで「問題」と言っているのは、筆者が「自然」をどのようなものと捉えているからか。本文に即して、解答欄に合うように五十字以上六十字以内で説明せよ。

問7　傍線部④「自然にどうかかわればいいのでしょうか」とあるが、筆者はどうかかわればいいと考えているのか。その説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア　人間の利益を多様な側面から捉え、個人よりも地域や社会の利益を重視し、現在だけではなく将来世代の利益も認めるといった遠大な視野を持って、人間の利益の実現を中心に据えて自然を管理していく。

イ　人間の安定的生存を目的とし、水や空気も人間に役立つものとして思い通りに利用し、現在の個人の欲求を出来るだけ尊重するといった現実的な観点によって、現在世代の利益を優先して自然を管理していく。

ウ　人間の経済的利益を多様に理解し、経済学や生態学の観点からも利益を追求し、現在よりもむしろ将来の利益を重んじるといった広大な視点によって、将来世代の利益が最大になるように自然を管理していく。

エ　人間の豊かな生活を目標にし、環境に適応して変化する人間の多面性を理解し、個人の欲求と社会的利益の調和を目指すといった総合的な思考によって、人間の利益とは何かを追究しながら自然を管理していく。

オ　人間中心主義を保持し、何より個人の経済的な利益に反しないように注意し、将来の個々人の利益を丹念に考えるといった長期的な展望を持って、人間の個人としての利益の確保を優先して自然を管理していく。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「後藤大輔」は、東京ディズニーリゾートの美装部（＝着ぐるみの着脱や管理を担当する裏方の仕事）で準社員（アルバイト）として働いていた。ある日、ディズニーランドの象徴であるミッキーマウスの着ぐるみが紛失するという大事件が起こる。これが明るみに出るとアメリカ本社との契約が打ち切られるという危機感のなか、調査にあたった「沼丘」は、紛失直前に着ぐるみを管理していた準社員の「藤木恵里」がステージダンサーのオーディションに落ち続けていることを知って、彼女がその恨みから着ぐるみを隠したに違いないと決めつけ、厳しく責め立てた。そのことで追い詰められた恵里は「ビッグサンダーマウンテン」のレールの上に座り込み、長時間その走行を停止させてしまった。一方、恵里の無実を晴らそうと奔走した後藤は、着ぐるみが配送ミスでディズニーシーの野外倉庫に保管されていることを突き止め、ただちに現地に向かって、豪雨のなか水没寸前だった着ぐるみを無傷で回収した。本文はその翌日の朝の場面であり、後藤は、恵里と二人でミッキーマウスの着付けをしている。

そのとき、戸口にあわただしい足音がきこえた。扉が開くと、調査部の沼丘と法務部の柿崎が、血相を変えて踏みこんできた。

沼丘は後藤に目をとめ、次いで恵里に視線を向けた。「ここでなにをしてる」

「なにをって」後藤はいった。「もうすぐパレードですから。着付けをおこなっているんです」

「着付けだと」沼丘はミッキーマウスをじろりと見た。「主要なキャラは正社員立ち会いのもと、経験を積んだ美装部員によっておこなわれるはずだ。きみらが手をだせる仕事ではない」

「※1スーパーバイザーの早瀬さんの許可を得て、替わってもらったんですけど」

柿崎が渋い顔をした。「そのことなら、さっき外できいた。ベテラン勢が戸惑ってたぞ。いったいどういうつもりだ」

「それは、その」後藤は恵里を見た。「彼女に自信をつけさせたくて」

「自信？」沼丘の口もとが不敵に歪んだ。「※2キャストでなくなる人間に、自信をつけさせてどうなるというんだね」

①恵里が沈痛な面持ちになり、床に目を落とした。やはり。そういう諦めのいろが、表情に広がっている。

後藤は沼丘を見つめた。「彼女にはクビになる理由はないと思いますが」

「馬鹿をいえ」柿崎が腕組みをした。「※3威力業務妨害。損害賠償義務もある」

「それについては、あなたたちの見当はずれの追及に端を発したこととして、X不問に付すものだと思ってましたが。※4久川さんもそういってたし」後藤はミッキーにたずねる顔を向けた。「そうでしょう？」

Aミッキーマウスはまた指でOKサインをだした。

沼丘は苛立ったようすでいった。「彼はわが社における法の専門家だ。大学の法学部レベルとは話がちがう」

「へえ」後藤は頭をかいた。「彼女に非はないのに、責任を負わせるっていうんですか」

「彼女には非がある。きみにもだ、後藤。ランドでの職務を放棄して、勝手にシーに向かい、※5デリバリーセンターの人間に情報を開示させたり、無断で倉庫に立ち入ったりした」

「そうでもしなきゃ、ショー用ミッキーは水没してました」

「もとはといえば」と沼丘はじろりと恵里を見た。「彼女の失策で、ショー用の着ぐるみがシー方面に送られたからだろ」

B室内は静まりかえった。②後藤は沼丘を見つめていた。沼丘も、後藤を見かえしていた。

後藤はきいた。「事実を曲げるんですか」

「曲げてなどいない」沼丘はいった。「すべて真実だ」

「配送のミスはデリバリーセンターによるものです。いや、彼らの過失だったかどうかも疑わしい。複雑すぎるシステム管理に改良の余地があったんです」

「一準社員が会社を批判かね」

「ええ、そうですとも」後藤は声高にいった。「僕たちはゲストの笑顔に接するのが好きです。そのためにこの仕事を選んだんです。ディズニーランドを支えるためなら、なんだってします。自分で正しいと思った道を進みます。スーツを着て本社棟におさまっておられるあなたたちは、僕たちをたんなる盤上の駒とでも見ているのかもしれない。でもここは、すべてが手作りなんです。ゲストの夢を守るために誰もが全力を尽くしてるんです。たしかに規則を守ることは重要です。けれども、なによりも優先されるのはゲストのために働くことではないですか。ディズニーランドを永遠に素晴らしい楽園として維持していくことではないんですか。僕らが愛しているのは会社じゃない、ディズニーランドなんです。あなたたちの立場を守るために働いてるわけじゃありません！」

一気にまくしたてて、少し息がきれた。荒くなった呼吸を整えながら、後藤は沼丘をにらみつけた。

沼丘は硬い顔で後藤をじっと見つめていたが、やがて嘲笑に似た笑いを浮かべた。

「綺麗ごともいいところだ。だからきみらはアマチュアなんだよ。キャストではなくゲストとしてインパークして、わが社に金を落としていけばいいんだ」

後藤は憤りを感じた。「ディズニーランドを愛することを馬鹿にするんですか」

「まあ、そうだな。馬鹿だよ、きみらは。遊び気分で幻想にa浸って、それでパークを支える一員になったつもりでいる。じつはわれわれがそうさせているだけのことだ。きみらの無邪気な夢物語への忠誠心を利用して、安い時給でこきつかっている、た

だそれだけのことだ。きみらひとりひとりには、それぐらいの存在価値しかないんだよ」
「本気でそう思ってるんですか」
ああ、と沼丘はうなずいた。「なにかミスが起きたら、組織の末端を切る。トカゲの尻尾を切るみたいにな。準社員はそのために存在するようなものだ。不具合が起きたら責任を負ってもらう。きみらのようにね」
「配送ミスが彼女のせいじゃなくても、そうするっていうんですか」
「そうだ。彼女は美装部員として当日の着ぐるみ担当だった。上にそう報告すれば彼女のせいになる。b万事それで丸くおさまる」
「腐ってますね」後藤は侮蔑をこめていった。「正社員の久川さんが異議を唱えると思いますが」
C沼丘はつかつかとミッキーマウスの前に歩を進め、向かいあった。「きみもY肝に銘じておくことだ、久川。事実がどうであれ、一連のc不祥事は準社員に責務を負わせる。会社に混乱を齎したら、きみの立場も危うくなる。そこのところ、よく理解しておけ」
後藤は沼丘の高慢な演説をしばし聞き流していたが、沼丘が言葉を切ると、ミッキーに近づいていきヘッドに手をかけた。後藤は恵里にいった。「そっち持って」
恵里が駆け寄ってきた。ふたりは力をあわせて、ゆっくりとミッキーのヘッドを垂直方向に取り除いた。
まず息を呑んだのは柿崎だった。沼丘の反応は鈍かった。いったん目を逸らしてから、はっとした顔になり、あわてて視線を戻した。
ミッキーの着ぐるみを着た中村専務の険しい顔が、沼丘と柿崎をじっと見つめている。Dふたりの正社員は、獣ににらまれた小動物のように凍りつき、ちぢこまっていた。
奥の収納庫の扉が開き、隠れていた久川がでてきた。久川はすました顔で専務にきいた。「着ごこちはいかがでしたか。専務」
「たいへんだな」中村は額の汗をふきながらいった。「まっすぐ歩けそうにないし、前も見づらい。ただ、会話は明瞭にきこえた」
③沼丘と柿崎の顔に絶望のいろがひろがっていた。ふたりは言葉を失い、顔面を蒼白にして身を震わせていた。
後藤は恵里と共同で、着ぐるみを脱がしにかかった。グローブとブーツをはずし、背中のファスナーを下ろして、専務を解放した。久川同様に背の低い中村は、緩めていたネクタイを整えながら着ぐるみから離れて立った。
「いったい」沼丘がうわずった声を絞りだしてきた。「ここでなにを……専務」
中村は椅子から上着をとり、それを羽織りながら沼丘を見やった。「わが社を危機から救った準社員には、役員全員が会いたがっている。で、私が代表として来たんだが、彼らにミッキーになるよう勧められてね」
むろんそれは、沼丘たちの真意を専務に知らせるための作戦だった。久川の説得により、中村は協力を承諾した。沼丘たちがやってくるであろうパレード前の準備時間に、専務をミッキーマウスに仕立てて会話を聞いてもらうことにしたのだ。
「あの、専務。そのう」柿崎がしどろもどろにいった。「規則に準ずれば、※6プロップスは関係者以外、立ち入り禁止だろう。許可の書類を本社に申請したか？」
中村は柿崎を一瞥した。「④規則に準ずれば、その……」
もはやぐうの音もでないようだった。沼丘と柿崎は顔を見合わせ、それから後ずさった。失礼しました。甲高い声でそう告げると、慌てふためいた足どりで戸口をでていった。
ふたりの足音が遠ざかると、久川が頭をさげた。「専務、本当にありがとうございました」
「いや」と中村は笑いをこぼした。「楽しかったよ。それに、きみらの仕事の苦労もよくわかった。なにより、きみらは東京ディズニーランドを救った。キャストの誇りだよ」
後藤は恐縮して、久川同様にただ頭をさげるしかなかった。
「後藤君。美装部員として、これからもよろしく頼むよ」中村はそういうと、恵里に向き直った。「きみも、いずれいいダンサーになれそうだな」
恵里が顔をあげて、きょとんとした目で専務を見つめる。専務はもういちど微笑すると、戸口へと歩きさっていった。
E緊張が解け、室内に暖かさが戻ってきたように感じられた。後藤は恵里を見て、ため息をついてみせた。恵里も後藤を見て笑った。その瞳が、かすかに潤んでいた。
「さあ」久川が上着を脱いだ。「パレードまで時間がない。着せてくれ」
後藤は当惑しながらいった。「すぐ、先輩の部員たちを呼んできます」
「きみらがやるんだよ」
「え？　でも、ミッキーは経験者が……」
「もう経験したろ」久川はネクタイをはずしながら、後藤をじっと見つめた。「専務をミッキーにした美装部員だ、誰も文句はいわん」
恵里の顔に笑いがひろがった。後藤も思わず笑顔になった。「はい」
「急げ」久川がきびきびといった。「きょうは休日だ。ゲストを待たせるわけにはいかないからな」

（松岡圭祐『ミッキーマウスの憂鬱』）

注
※1　スーパーバイザー――各部門の管理責任者。早瀬は美装部の準社員をたばねている。
※2　キャスト――ディズニーリゾートで働く従業員をこう呼んでいる。
※3　威力業務妨害――恵里が「ビッグサンダーマウンテン」のレールの上に座り込んで走行を停止させたことを指す。
※4　久川――パレードでミッキーマウス役を演じている。着ぐるみ紛失の際には、沼丘らの不適切な対応に反感を抱いて、単身、後藤の元に向かい、着ぐるみの回収に協力した。
※5　デリバリーセンター――ディズニーランド内の様々な物資がいったん集められ、配送されていく場所。
※6　プロップス――ミッキー等の主要なキャラクターが出番前に控えている楽屋。

問1　二重傍線部a～cの漢字の読みをひらがなで答えよ。

問2　二重傍線部X「不問に付す」・Y「肝に銘じておく」の語句の意味として、最も適切なものを、次のア～オのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

X
ア　細部については問わない
イ　問い合わせには応じない
ウ　些細な問題とは考えない
エ　詰問することなどはない
オ　取り立てて問題にはしない

Y
ア　自分の発言の持つ重さを認識する
イ　周囲の意見に素直に耳を傾けておく
ウ　心に刻み込み決して忘れないでいる
エ　自分の立場を考え発言を控えておく
オ　じっくりと考えたうえで結論を出す

問3　傍線部①「恵里が沈痛な面持ちになり、床に目を落とした」とあるが、このときの恵里の気持ちについて七十字以内で説明せよ。

問4　傍線部②「後藤は沼丘を見つめていた。沼丘も、後藤を見かえしていた」とあるが、ここでの後藤と沼丘についての説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。
ア　後藤は、状況を正しく把握しきれていない沼丘の理解力のなさにあきれ果てている。沼丘は、準社員の枠を超えて動き回り、自分が知り得ていなかった情報まで把握している後藤に嫉妬心を抱いている。
イ　後藤は、沼丘の一方的で高圧的な発言に言いようのないほどの怒りを覚えている。沼丘は、準社員としての立場をわきまえず、正社員の自分の発言に異を唱え続けてくる後藤のことを理解できないでいる。
ウ　後藤は、あまりにも事実とかけ離れた沼丘の身勝手な発言にあっけにとられている。沼丘は、会社のために考えた筋書きを頭から否定してくる後藤に対して、会社の一員としての自覚を持つよう促している。
エ　後藤は、沼丘のあまりにも理不尽な発言に返す言葉を失っている。沼丘は、準社員に過ぎない後藤の言動など全く気にすることなく、企業の論理にしたがっている自らの正当性と優位性を誇示している。
オ　後藤は、沼丘の型にはまった優等生的な発言に反論する意欲を失っている。沼丘は、会社の規則を無視し自分勝手な行動を繰り返してきた後藤の姿勢に憤りを覚え、相手にする価値もないと突き放している。

問5　傍線部③「沼丘と柿崎の顔に絶望のいろがひろがっていた」とあるが、なぜ彼らはこのような表情になったのか、その理由を六十字以内で説明せよ。

問6　傍線部④「規則に準ずれば、プロップスは関係者以外、立ち入り禁止だろう。許可の書類を本社に申請したか？」とあるが、ここでの中村の説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。
ア　狼狽のあまり、自分たちこそが社内規則を破っていることに考えが及ばない柿崎たちに、心底あきれ果てている。
イ　柿崎たちとはこれ以上一緒にいたくないと思って、社内規則を持ち出すかたちで、彼らを追い払おうとしている。
ウ　内容をきちんと理解しないまま社内規則を利用してきた柿崎の過ちを指摘し、正しい使い方を具体的に示している。
エ　準社員達がこれ以上ひどい目に合わないように、社内規則を利用して、今後の柿崎たちの行動に縛りをかけている。
オ　社内規則をたてに後藤たちの行動を否定してきた柿崎の発言を逆手にとるかたちで、彼らのことをやりこめている。

問7　この文章の表現に関する説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。
ア　波線部A「ミッキーマウスはまた指でOKサインをだした」という描写によって、ミッキー役を演じる人間が、控え室で着ぐるみを身にまとった瞬間から、その役になりきっているということを印象的に伝えている。
イ　波線部B「室内は静まりかえった」という描写によって、事実をねじまげ準社員の恵里に責任を押しつけようとする沼丘の発言がきっかけとなって、この部屋が緊張状態に包まれたことが端的な形で表現されている。
ウ　波線部C「沼丘はつかつかとミッキーマウスの前に歩を進め、向かいあった」という描写によって、同じ正社員であっても、管理側の人間と実際に現場で客に接する者との間には対立が生じていることが示唆されている。
エ　傍線部D「ふたりの正社員は、獣ににらまれた小動物のように凍りつき、ちぢこまっていた」という描写によって、会社組織における上下関係の冷徹さ、残酷さと、それに抗うことの出来ない企業人の哀れさが暗示されている。
オ　傍線部E「緊張が解け、室内に暖かさが戻ってきたように感じられた」という描写によって、雲の上の存在である専務とのやりとりで張り詰めていた部屋の空気が、いつもの穏やかな状態に戻ったことを比喩的に表現している。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

紀伊中納言源治貞卿、はじめ※1西条にましましし時、福田の橋洪水に逢ひて流れければ、新しく造りて架けけり。かの卿※2ものへ行くとて、その所を通り給ひしが、近くなりて馬より下り、橋の下に入りて見巡りつつ、「多くの人さこそ力を尽くしけん」とて、①そのまま歩み行きて橋の上にのぼり給ふほどに、御供の人々「御馬に召さるべくや」と申しければ、「いやとよ。多くの人の手にて造り出せる橋を、予はじめて渡るに、馬の蹄にかくること α有るべからず」とて、乗り給はざりけり。またある時、百姓ども、御館の林の木を夜の間に盗み伐りければ、やがて捕へて斬罪せんとせしを聞き給ひて、木の伐りたるはまた芽を出だすべし。首を切りたるは再び β生ふべからずとて、その者の命を助けられし程に、②国民こぞりて御恵みの深きことを悦びけり。この卿はもとより学問を好みて、常の言ひぐさに、「今世の人、※3賢聖の書を読みて義理を論ずと a いへども、我が身の上のことに引きあてて、悪しき心悪しき b 行ひを改めんとすることを知らず。これはいかなることにか、③予その心を得ず」と宣ひけるとぞ。

（『落栗物語』）

注　※1　西条にましましし時――伊予国新居郡西条の藩主でいらっしゃった時。
　　※2　ものへ行く――ある所に出かける。
　　※3　賢聖――賢人と聖人。知徳の傑出した人。

問1　二重傍線部a「いへども」b「行ひ」の読みを、それぞれすべて現代かなづかいで答えよ。

問2　波線部α、βの中に「べからず」とあるが、この二つは訳し方が違う。最も適切なものを次のア～エのうちからそれぞれ選び、記号で答えよ。
　ア　～ことはできない　　イ　～てはならない　　ウ　～ないだろう　　エ　～ないつもりだ

問3　本文には会話文だが「　」がついていない部分がある。その部分を抜き出し、最初と最後の三字を答えよ。

問4　傍線部①「そのまま歩み行きて橋の上にのぼり給ふほど」とあるが、次の文は治貞卿がこのように行動した理由を説明したものである。文の空欄Xに当てはまる言葉を二十字以内で答え、空欄Yに入る内容として最も適切なものを後のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

「治貞卿は、この橋は［　　X　　］であり、［　　Y　　］と考えたからである。」

Y
　ア　橋を最初に渡る人は徒歩で隅々まで点検すべきだ
　イ　最初から馬で渡るには、橋の頑丈さに不安が残る
　ウ　自分が初めて渡る時に馬に乗っているのは失礼である
　エ　人が初めて渡った証として自分の足跡を残す必要がある
　オ　自分は初めて渡るので、歩きながらゆっくり橋を鑑賞したい

問5　傍線部②「国民こぞりて御恵みの深きことを悦びけり」とあるが、「御恵み」とは治貞卿がどのようにしたことを言うのか。三十字以内で説明せよ。

問6　傍線部③「予その心を得ず」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。
　ア　治貞卿は、今になって人々が賢聖の書物を読んで議論するようになったものの、そうなった理由がわからず不思議に思っているということ。
　イ　治貞卿は、賢聖の書物を読んで議論する人々が、学んだことを自分の心や行動の改善に活かそうとしないことに疑問を抱いているということ。
　ウ　治貞卿は、人々に賢聖の書物を読んで議論をすることを促したが、それが人々の生活の向上につながらないことに焦りを感じているということ。
　エ　治貞卿は、賢聖の書物を読んで議論して習得したことは心や行動の成長につながらないと人々が確信していることに反感を抱いているということ。
　オ　治貞卿は、賢聖の書物を読んで議論する人々が、自分の利を求めるばかりで社会を少しも良くしようとしないことに憤りを覚えているということ。